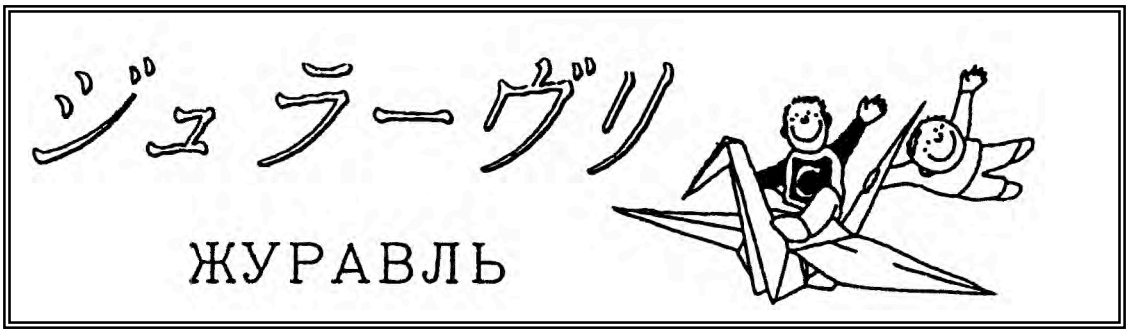


チェルノブイリ原発事故２２周年の集い

繰り返さないで！チェルノブイリ

被災地の友人たちとともに未来を見つめて…

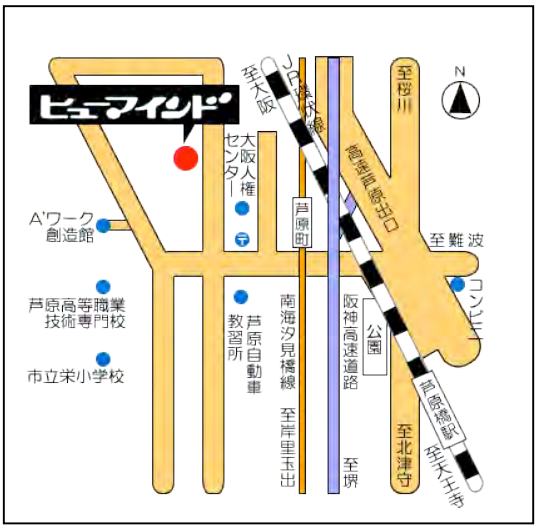
４月２７日（日）午後１時～４時半

ヒューマインド（大阪府福祉人権推進センター）

☆ビデオ上映

☆救援バザー

☆歌　など　…計画中



チェルノブイリ事故からまもなく２２年めの春を迎えます。放射能の汚染の続く被災地で、私たちの友人は子どもたちの健康と生活を守るための努力を続けています。

日本でも、原発の老朽化や地震などによって、チェルノブイリのような事態が起こるかもしれない…繰り返えさないで！チェルノブイリ。被災地の友人とともに未来を見つめて…これからも交流・支援を続けましょう。「チェルノブイリ事故２２周年の集い」にぜひご参加下さい！

「集い」の問合せ先：0797-74-6091（たなか）, 0798-44-2614（ふりつ）
<cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp>

ベラルーシのチェルノブイリ被災地へ…
救援カンパを届けてきました！

昨年１１月１９～２９日、事務局の振津は通訳の松川さんとともにベラルーシの被災地を訪問し、皆さんから寄せていただいた救援カンパを届けてきました。（訪問日程表ご参照下さい。１２月２日「救援関西発足」６周年の集いでの現地報告に加筆・編集し掲載します。紙面の都合で、訪問先の全てを今回、網羅することはできませんでした。次号以降に補足します。）　振津

ミンスク・マリノフカの「移住者の会」～*「過去」ではないチェルノブイリ*

事故から２１年を経たベラルーシ。初めて現地を訪問してから１６年が経過しましたが、当時のことを思い起こしてみると、首都のミンスクでは、街の様子も人々の暮らしも、当然のことながら変わりつつあります。ルカシェンコ大統領の「欧州諸国に並ぶ生活レベルの達成を」とのかけ声の下、国の「玄関」である首都ミンスクでは、駅も立派なビルになり、街の中心には地下街も建設されました。しかし、庶民の生活は決して楽ではありません。「移住者の会」のメンバーも夫婦共稼ぎでなんとかやりくりをしている家庭がほとんどで、稼ぎ手が病気になったり失業したりすると、たちまち大変なことになってしまいます。「政府は“ ベラルーシは発展している”“ 犯罪もなければ、障害者もいない” と言って、チェルノブイリの被災者への手当や薬代の援助を今年いっぱいで打ち切ろうとしているんです。」と、「移住者の会」代表のジャンナさんはこぼしていました。イタリアやドイツの民間団体から会への支援も、個人的なつながりを除いては事実上なくなってしまったとのこと。これは政府が外国の民間団体からの支援を「統制」してきたためでもあります。そんな中でも続いている日本の私達からのささやかな支援は、「移住者の会」にと

訪問日程：

１１月１９日　日本出発／欧州で乗り継ぎ
２０日　午後ミンスク着：マリノフカ泊
２１日　朝、松川さんと合流／市内でバザー用の民芸品の購入
「移住者の会」ターニャさん、ジャンナさんと話し合い
２２日　クラスノポーリエへ移動（ベーラさんお迎え。）
途中でベリニチの寄宿学校訪問
２３日　クラスノポーリエの学校、幼稚園、子どもの保護施設など訪問
２４日　チェリコフの幼稚園、子どもの保護施設を訪問
２５日　ベーラさんとともにロシアのノボツィプコフ（ブリヤンスク州）を訪問
（松川さんは直接にモスクワへ帰る）
２６日　ミンスクに移動
２７日　ミンスク発／欧州乗り継ぎ
２８日　日本へ：機中泊
２９日　帰国

ってとても貴重なもののようです。チェルノブイリ事故被害を「過去のもの」にしようとする政策が進められ、事故を直接体験した被害者以外の多くの人々から事故の記憶がうすれてゆく中で、毎年、日本の私たちが訪問すること自体が「移住者の会」の人々にとって「心の支え」のひとつになっているのを感じます。

政治的な「しめつけ」が強まっていることも、人々の気持ちに重くのしかかっています。政府の政策にはたとえ理不尽なことでも反対することは一切できず、愛国主義的なスローガンばかりが目立ちます。「学校では、先生も生徒も規則でがんじがらめ」「反政府集会の様子を撮ったビデオを見せられて、自分の生徒（高校生）が参加していないかどうかチェックするようにと言われるのよ」と、教師のターニャさんは嘆いていました。「移住者の会」も、正規の民間団体として国に登録することができなくなってしまったとのこと。それでも会では定期的に各アパートの棟の担当者が集まって話し合いをし、さまざまな「互助活動」を続けています。「最近、以前に皆さんが私達にして下さったように、皆で衣類やおもちゃを集めて、地域の孤児院に届けたりもしたのよ。」と話してくれました。

前年に私達が届けた救援カンパで、「移住者の会」では、①粉ミルクやベビーフード（月あたり４箱＝２週間分くらいの量を１年間、１２８人に配布）②子どもの多い家庭（４６人）、障害を持つ子どもたち（１６人）、親がアフガニスタン帰還兵（９０年代にソ連軍兵士として派兵され、帰還後、精神的なトラウマなどを抱えている人も多い）の家庭の子どもたち（４５人）に新年のプレゼント③貧しい家庭への支援（１０家庭）④食料品などの支援（２９家庭）を行ったとの報告を受けました。

「ミンスクで育った移住者の家庭の子どもたちは“ミンスクっ子”で、自分たちのルーツやチェルノブイリ事故のこともあまり知らない。」と、ターニャさん。ジャーナリストであるターニャさんの夫のジェーナさんは、移住者の体験談を本にして出版したいと考えているそうです。「当時のことをよく知っている移住者に話を聞くような取組みを、若い人々と一緒やってみたい。」とジャンナさんも話していました。事故から２０年以上が経ち、若い世代に事故の体験とこれまでの活動を伝えてゆくことは、ベラルーシの被災者にとっても重要な課題です。

「移住者の会」の世話役、ジャンナさんとターニャさん。
左端は通訳の松川さん。

汚染地クラスノポーリエ訪問

若いお父さんはほとんど出稼ぎへ

首都から離れた「田舎」のクラスノポーリエでは、相変わらず時間がゆっくり流れているようです。しかし、ミンスクほどではありませんが、ここでも少しは変化がみられます。この数年「街を美しく…」との政府の方針で表通りに面した家々の柵がペンキ（ちょっと奇抜なピンク！）で塗られ、区庁舎周辺に花壇が整備されたり、一部の学校には新たなスポーツ遊具などが設置されたりしました。人々の生活はというと、「この地区では、仕事もあまりないし、健康で働ける若い男性は、ほとんどロシアなどに単身赴任で働きに行っているのよ」と、小児科医のベーラさんは話してくれました。（そういえば、私たちの友人の周囲でも、ベーラさんの息子、娘婿も、２年前に来日した教師のエレーナさんの夫も…多くの「働きざかりのお父さん」がロシアに単身赴任で働きに行っています。）ある一定の生活水準を維持しようと思えば、家族を残して、たとえ劣悪な条件であってもベラルーシ国内よりは給料の高い職場を求めてモスクワやペテルブルグなどに「出稼ぎ」に行くことを選択する若い夫婦の家庭も多いのです。コルホーズ（集団農場）での月給は 3000-4000 ベラルーシルーブル（２－ ３千円くらい）ほどで、食料品などの物価、ガスや電気代、家賃も上がる中で、子どもへの手当や、年寄りの年金で現金収入を補ってなんとかやりくりをしている家庭も多いとのこと。そのような状況にもかかわらず、新年からチェルノブイリ被害者への手当、交通費や薬代の補助がなくなるかもしれないことをベーラさんもとても心配されていました。チェルノブイリ事故による放射能汚染で、多くの耕作地を汚染され、移住などで人口も減り、落ち込んでしまった地域経済の復興は、まだまだのようです。昨年、クラスノポーリエに､久しぶりに建築と木材加工の新しい企業ができたとのことで､「地域で職場が増えるきっかけになれば…」と、ベーラさんは期待していました。

地区病院で

クラスノポーリエでの明るいニュースのひとつは、今年、初めて地区病院への予算が増額されたことです。住民数が減ったために病院全体としては、この数年、縮小を余儀なくされ（すでに報告したように産科病棟は閉鎖された）ましたが、昨年、手術室が改修され、いくらか新しい設備も整えられたとのこと。超音波検査室には、なぜかスイス政府からの援助だという新しい超音波検査装置もありました。

小児科ではベテラン医師が急にやめたため、引退していたベーラさんが職場に復帰して穴埋めをしているとのこと。若い医師がローテーションで派遣されてくるのですが、なかなかクラスノポーリエのような地方の小さな街に留まって勤務を続けてくれないそうです。小児科病棟には、以前と同じく親がアルコール依存症で育児放棄をしてしまった子どもたちが数人、（社会的）入院していました。子ども保護施設（プリユート）に入所できるようになる３歳までは、病院で預かって育てているのです。このようなケースは、まだなかなか減らないとのこと。

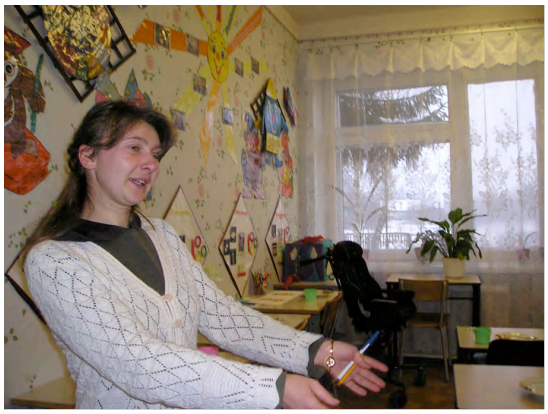
日本より一桁高い住民の体内セシウム量

病院では、年に１回住民検診を行っていますが、血液検査や甲状腺の超音波検査と同時に、体内の放射能（セシウム１３７）の量を測定します。この測定器（簡易式のホールボディカウンター）は、一年前の訪問の際には故障し修理のメドが立っていないとのことで、心配していたのですが、今年はちゃんと動いているとのことで安心しました。毎月１００人くらいの住民の測定を行っているそうです。今回は詳細なデータを整理してもらうことはできなかったのですが、記録ノートをさっと見せてもらいました。住民の体内のセシウム 137 の量の記載では、大体５～１５Bq/kg の数字が並んでいて、これは体重６０kg として 360～900Bq、年間の内部被曝量に換算[1kBq→0.04mSv (UNSCEAR, 1998)]して 0.014～0.036mSv くらいになります。「たいして大きな値ではない」と言われるかもしれませんが、これは日本での人々の体内セシウム 137 の測定データと比較すると一桁ほど高い値です。事故から２０年以上経った今でも、汚染地でこのような状況が続いていることの問題を考えさせられました。ノートに記載されていた中で、数字の高い人では 484.7Bq/kg（1.4mSv／年の被曝に相当）との記載もみられました。汚染地では、年間被曝量 1mSv／年を目安（基準値）にして、人々に食物や生活上の注意をしているすそうです。（森のきのこを食べないように…とか注意するそうです。）

体内放射能測定の装置

新しく開設された「障害児センター」

クラスノポーリエでは、一昨年開設された「障害児センター」（ディケアセンターのような施設）を訪問しました。このセンターは教育委員会の「指令」で開設されたもの。ダウン症などの４歳以上（うち就学年齢の者４人）の様々な症状の子どもたち１１人が通っています。クラスノポーリエ地区全体には、センターでのケアの対象となるような子どもたちが８０人ほどいるそうなのですが、送迎バスが行ける範囲が限られてしまうので、センターから遠い農村部の子どもたち全員をフォローすることはまだできません。しかし、これまでは「障害」を持つ子どもたちは学校にもゆけず、家からほとんど出ることもできませんでしたし、家族が介護を全て担わねばなりませんでしたので、このセンターの開設は「画期的」なことです。職員７人（保母、教師、心理カウンセラー、ソーシャルワーカーなど）は全員、今のところ教育委員会の職員として働いています。教育委員会によって開設されたものの、センターの運営のための特別な予算は組まれず、地区の幼稚園の一画を間借りして教材なども職員の手作りです。「障害を持つ子どもたちも成人して将来的には社会参加できるようになれれば…」と、熱心に取組むセンター長や職員の方々の意


障害児センターで先生のお話を聞く

気込みが伝わってきました。ベーラさんの提案で、前年の私たちからの救援物資購入用のカンパで、このセンターでの給食用の食器や、子どもたちの衣類を購入したそうです。

クラスノポーリエでは、昨年の資金カンパは、①貧しい家庭、子どもの多い家庭、親のいない子どもたち、お年寄りなどへの食料、衣類などの支援②クラスノポーリエの病院では治療や診断のできない病気の子どもたちが、ゴメリなどの大都市の病院に手術や診断のために行く際の交通費や治療費③貧しい家庭の子どものたちが保養に行く際の交通費などに使った、との報告をベーラさんから受けました。また、これまで粉ミルクやベビーフードに使っていた「子ども元気キャンペーン」からの資金を、特に貧しい家庭の２歳までの子どもの栄養補給のためにジュースや果物を購入するのにも使いたいとのことでした。「もちちろん OK です」とお答えしました。

ロシアの NGO を訪問～ロシアの非汚染地域での保養計画実現に向けて

ベーラさんと一緒に、ロシアの汚染地域のノボツィプコフの NGO「ラドミチ」を訪ねました。クラスノポーリエからは車で５－６時間です。「ラドミチ」が、取組んでいるロシアの非汚染地域での子どもたちのサマーキャンプ「ノボキャンプ」に、クラスノポーリエの子どもたちにも「保養」の一環として参加してもらおうという私たちの提案を受けて、直接に「ラドミチ」を運営している人々とベーラさんと相談をしてもらうためでした。「ノボキャンプ」は、地域の若者のボランティアなども参加して運営しているユニークな活動です。（「ラドミチ」の地域での幅広い取組み、これまでの活動の経緯については、次回、報告したいと思います。）ベーラさんは、クラスノポーリエと同じく汚染地域で、しかもクラスノポーリエでベーラさんが暮らしている地域よりもさらに汚染が高い地域（本来なら移住の対象になるレベル）にもかかわらず、移住をせずに生活を続けることを選択したノボツィプコフの人々の苦労を思うと同時に、その前向きな活動に心を動かされたようでした。３月頃に今年のキャンプの費用が決まるので、その頃に今後の具体的なこと（このキャンプにクラスノポーリエの子どもも参加するのか、参加するなら何人くらいが適当かなど）について改めて相談することになりました。

↑日本の子どもたちに…と手紙を託してくれたチェリコフのプラレスカの子どもたち（P11 に掲載）

今、私たちに何が求められているのか

チェルノブイリ被災者への国際支援も、物資などの直接的な援助から、被災地がいろんな側面で「回復」できるように長期的な協力関係が求められる段階へと移ってきています。また、このような市民の交流を通じて、私たちが「新たなヒバクシャを生み出さない」ための基盤が築かれるのだと思います。広島・長崎、そしてチェルノブイリを決して繰り返してはならないのです。

これからの私たちの取組みを考えるにあたって、２０周年に来日した時のベーラさんの言葉を引用したいと思います。

昨年来日された時のベーラさん（クラスノポーリエの小児科医）の言葉から＊

この先、何十年もかかる大きな仕事が残っている。汚染地の人々の被曝や食物汚染と健康の関係を明らかにすること。病気の発症メカニズム、診断基準、治療の確立。被曝してしまった身体を「元の状態」に戻してやる方法を考えること。核産業による過小評価でなく、独立した医学機関による研究と治療。客観的、真実に基づく、公開された被害評価。

子どもたちこそが、世界中の大人たちを核について考えさせ、人間の心を呼び覚ましてくれた。子どもたちを通じて、また子どもたちが理解することによって、原子力の平和利用と軍事利用に対してどのような態度をとるべきか明らかになった。

１２月２日の「発足１６周年の集い」では、下記の取組みを提案し話し合いました。これからも毎月の「運営会議」で皆さんと議論しながら、具体的な取組みを進めてゆきたいと思います。

＊ ***これまでの支援を続けること：***

現地の友人たちの手を通じて、子どもたちの保養、治療、心身の健康増進に役立っている。

現地の人々の「復興」への努力をより有効の支援できる形で。（支援カンパの配分もそのつど考える）

＊ ***新たな「保養支援」について***：まずは試み始め、やりながら検討しつつ、取組んでゆく。

＊ ***様々な交流（生活状況、文化、伝統など）を通じ、また共に双方のかかえる問題を考え、議論し、取組む中で、相互の理解を深める。***

「広島・長崎、そしてチェルノブイリを繰り返してはならない」という共通の思い。

体験を「風化」させないために、どう体験と活動を若い世代につないでゆくか。

若い人々どうしの交流も大切。

＊ベラルーシの原発建設計画の問題

現地では「反対はできない」状況。ロシアとベラルーシとの関係、国際的な原子力産業の動きなどが背景にある中で、私たちとしてどうとらえるのか。「何か」できるのか？

＊チェルノブイリ被害について、さらに次の１０年、２０年の科学的評価に意識的に取組む必要がある。環境・健康被害だけでなく、社会・文化的なものも含めて。

今回の訪問で現地に届けたカンパ

資金援助	クラスノポーリエ（ベーラさん預かり）	1500			
	チェリコフ（バーリャさん預かり）	500			
	マリノフカ（「移住者の会」）	1000			
	ソーヌチカ幼稚園	300			
	障害者センター	300			
	チェリコフ「幼稚園通園支援」（バーリャさん預かり）	500			
		4100	ドル	466703	円
救援物資購入資金	マリノフカ	300			
	チェリコフ（幼稚園とプリユートで折半）	300			
	ベリニチの「寄宿擁護学校」	300			
		900	ドル	102447	円
「子ども元気」	クラスノポーリエ	1000			
	マリノフカ	1000			
	チェリコフ	1000			
		3000	ドル	341490	円

11 月 19 日のレート：1 ドル＝113.83 円

ベラルーシの友人の皆さんからのメッセージ

「チェルノブイリヒバク者救援関西」のみなさま！

「救援関西」の創立記念日にみなさんが集まられることをうれしく思います。不幸にあった人たちを助けるという共通の理想と大きな希望がみなさんを結びつけているのでしょう。私たちも同じ考えと感情を持っています。私たちはみなさんの社会活動に尊敬の念を抱いています。私たちの感謝は子どもたちの「ありがとう」という 1000 の声です。みなさんの支援が私たちに問題を解決する力を与えてくれます。心からみなさんの健康と幸せとご無事と成功をお祈りいたします。ベラルーシ、クラスノポーリエ地区とチェリコフ地区のチェルノブイリ原発事故の被災者である子どもたち、両親たちはみんな感謝しています。

2007 年 11 月

クラスノポーリエとチェリコフから

ヴェーラ、ヴァレンチーナ、サーシャ、レーナ、ラリーサ、ガリーナ

日本、大阪の「チェルノブイリヒバク者救援関西」のみなさま！

「救援関西」から、クラスノポーリエの保育園「ソーヌシカ」へ支援をしていただいたことに心からの感謝を申し上げます。みなさんの支援のおかげで以下のものを購入できました。

1　紫外線ランプ（保健室の殺菌用）　２つ
　子どもたちの健康のため、病気の予防を効果的にできるようになりました。
2　保健室の医薬品保存用の冷蔵庫の修理
3　救急医薬品の購入、病気予防

チェルノブイリ原発事故の被災地区に住む子どもたちへの思いやりに感謝します。

「救援関西」の皆様に、困難だけれども素晴らしい活動への力と成功をお祈りいたします。

尊敬をこめて　　第２保育園「ソーヌシカ」職員一同

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」のみなさま

「救援関西」発足 16 周年おめでとうございます。

みなさんからの子どもたちへの人道支援に感謝しています。核のない世界をつくり、人体に悪い影響を与える原子力をなくすという大きな希望が私たちを結びつけています。

私たちの協力と友情が続きますように。

クラスノポーリエの地区の住民からみなさんへの心から健康、幸せ、成功をお伝えいたします。

院長　モロゾワ・ガリーナ

「救援関西」の友人の皆さんへ

チェリコフ市、第六幼稚園（コロソク幼稚園）の職員一同、同幼稚園への支援、恵まれない家庭への支援、幼稚園費の支援に感謝します。

夏に母親が亡くなり、父親が一人で三人の幼い子どもを育てている家庭からと、職員一同から、心からの御礼を申し上げます。この家庭には、皆さんからの支援で、子どもたちに新学期のための衣服を購入することができました。私たちのコロソク幼稚園に、ご関心と、支援を寄せて下さり、ありがとうございます。　　園長　リュドミーラ・シャムツカヤ

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さんへ

プラレスカ（子ども保護施設）の保育士、職員一同は、皆さんが私たちにして下さった支援と友情に感謝します。「日の出る国」日本に、私たちの友だちが沢山いることを嬉しく思います。困難な時に手を差し伸べてくれる友人がいることは、とても重要なことです。私たちは、いつも皆さんのことを思い出しています。皆さんが、大好きです。毎年、皆さんにお会いできることを楽しみにしています。　　プラレスカ（子ども保護施設）の保育士、職員一同

（訳：松川直子）

チェリコフの子ども保護施設から

「日本のお友だちへ、メッセージを届けて…！」

「子ども保護施設」は、病気や様々な理由で両親がいなくなったり、アルコール依存などため子どもの養育ができない家庭環境の子どもたちが３ヶ月間過ごす施設です。その間に、親の更正を促して、できるだけ家庭に返す努力をしています。また、子どもの将来を考えて養子や寄宿学校へと橋渡しをしたりもします。「日本にも僕たちの所と同じような施設があるの？」「その子どもたちに手紙を届けて…」と、チェリコフの施設「プラレスカ」子どもたちが絵と手紙を託してくれましたので、紹介します。

親愛なる日本のご友人の皆さま！

　私たち、保護施設『プラレスカ』の子どもたちは、あなたたちがあたたかく接してくださること、そのお気遣いに感謝しております。あなたたちと触れ合うことができて、とても光栄です。私たちがいかに美しい国で暮らしているかを、あなたたちに知っていただきたく思います。国の名前はベラルーシと言います。川や湖、森がたくさんあるところです。私たちは、学校に通い、外国語―英語を勉強しています。残念ながら日本語の授業はありません。あなたたちに日本語で手紙が書ければ良いのですが･･。

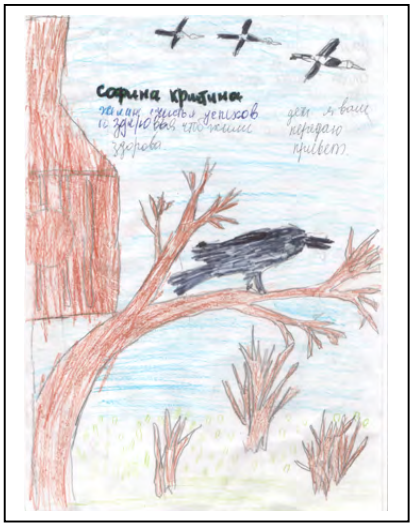
　何をして過ごしていらっしゃいますか？学校はいかがですか？あなたの国にはどのような美しいものがありますか？以上のことを教えていただけないでしょうか。私たちはあなたたちの国についてほんの少ししか知らないのです。ご健康、ご多幸、人生における喜びをお祈りいたします。お父さまとお母さまがご健在であられますよう。

　保護施設の子どもたちより

☆大切なお友だちへ！
あなたたちの伝統に触れることができて嬉しいです。
あなたたちがとっても元気で、悲しみが少なく、喜びがあなたたちの日々を輝かせますように。
成功と幸せを願います。
これからの人生が喜ばしい、晴れ晴れとしたものになりますように。
あなたたちの心が、熱く思いやりのあるものでありますように。
お家が快適で、幸せで満ちますように！
活気とエネルギーも。
いつもの人生の１日１日に、喜びだけがもたらされますように。

ナースチャ

☆地球のように大きな幸せ、春のこだまのような高らかな笑い、白樺のような永遠の柔らかさ、起これば良いなと思いつくこと全てを願います。
全ての花の香りと夕焼けは、この日に私たちがあなたたちにプレゼントするために用意したものです。毎朝の甘美なバラ、光、あたたかさ、善良さ。
優しい言葉と地球の愛を。　　ソフィーナ

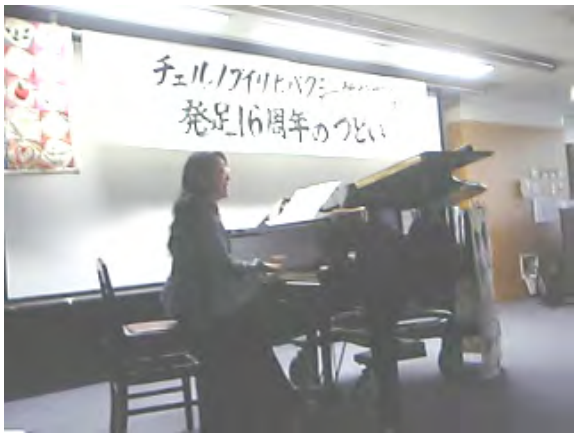


人生に喜びを、仕事には知恵を、友人には信頼を、心には若々しさを。
いつでもエネルギッシュで、親切で、魅力的であってね。
いつでもあなたとともに喜びがありますように。
健康で快活で幸福でありますように。
悲しみは遠くへ。　　ターニャ・ソーリナ
（訳：西田容子）

☆2007年12月2日　救援関西１６周年のつどい☆
オペレッタ歌手の森田留美さんが
チュルノブイリの子供たちによせて歌って下さいました。

一つ目はベラルーシ共和国の小さな町クラスノポーリエの子供の作文を、そのまま歌にしました。（正直、散文をそのまま即興で歌うなんて！！？こんなことができるのは森田さんしかいないと私は思う）

「よもぎの地のかえで」。１３歳の子供の作文ですが、読むうちに、内容の重さと格調の高さにとまどってしまいました。皆さんはどうでしたか？地名チェルノブイリは直訳すると「黒いにがよもぎ」。荒れ地にポピュラーに生えている親しみのある植物「よもぎ」や楓の木をとおして、目に見えず人々の命を侵しつつある放射能の恐怖、故郷と人類の行く末を子供の視線で語っていました。中に出てくる「ヴィソーキボーラク村」は、彼女の住んでいる地区にあった高濃度放射能汚染にて埋められた村です。２００５年に私たちが村を訪問した時、すでに廃墟が森に取り込まれつつありわずかな人間の痕跡が非常に痛々しかったことを思い出します。それでも彼女は苦しんでいる故郷の大地への愛着を詠う。「私も（かえでの木に）おじぎを返す　生きている証に」。



森田さんが歌うと、１３歳の彼女が、前半は友人に胸の内を打ち明けているように、後半は世の中の人々すべてに訴えているように感じました。

二つ目は***「アヴェマリア」***・・・・「祈り」とか「強い願い」とか、又それを通り越した「行き場のない苦しみ」「つらさ」はどう表現したらよいか、森田さんと少し悩みました。カッチーニのアヴェマリアは思いを重ねることができる曲かなと思い、オペレッタ仕様に歌って頂きました。

三つ目はみんなで歌える歌ということで、***「アメージンググレース」***を歌唱指導。いろんな訳詞がありますが、これは森田さんお勧めの日本語の詞で、４番が特にいいかと思います。かなり厳しーく（？）発声の指導もあり、目を白黒・汗たらりでしたが、みなさんと一緒に歌うのは気持ちが良かった。歌は、知らないうちに、普段は想像できない他人の心の内を垣間見せて、重ね合わせ、響き合わせてくれます。　　由美

「１６終周年のつどい」グループ討論から…

「つどい」では、現地訪問報告を受けて、今後の私たちの取組みについて、参加者が３グループに別れ、三つのテーマについて話し合いました。

☆グループ１

１）現地の子供たちのために　～保養と支援の継続～

・持続することが大切

・費用をどうするか？いつものことだがこれが大変

・保養は実際に子どもたちの健康に効果があるのか疑問。一時的に保養に行っても被災地で暮らしていたら被曝量はかわらないのでは？

・上記の意見へ。もちろん根本的な対策ではない。しかし、原爆ブラブラ病に代表されるような子どもたちの全体的な免疫力の低下や体力の低下にたいして、非汚染地での食事・太陽のもとでの生活は重要かと。

２）チェルノブイリを忘れないために　～ベラルーシと日本で若者と共に～

・子どもたちや、若い層にどう伝えるか？日本でも被災地でも課題である。

・大学祭等でアピールできる機会はないか？

・チェルノブイリをまったく知らない世代もふえている。中学高校対象にしても、環境を考える授業を作ろうとすればつくれる。考えてくれそうな学校の先生をゲットする。

・そういう先生たちに持って行きやすい、チェルノブイリの被害について、分かりやすい教材を作ってほしい。

・高校生のスタデイツアー等、考えられないかな。

・私はまず、自分のできることをやってみるのが良いかと思う。たとえば、ピアノをおしえているが、歌の指導もしている。そして声を出して原爆詩の朗読をさせてみた。自分で感情をこめて読もうとしたら子どもなりに色々考えて深めていっている。

・子どもたちのミュージカルを作ってアピールできたら。

・ホームページとブログの利用

3）ベラルーシの友人と日本の私たちがお互いに知るために：時間切れで話し合えず

（報告：由美）

☆グループ2

1）現地の子供たちのために　～保養と支援の継続～

＊もう少し救援カンパを増やすためには？

・　若者は目的がはっきりしていれば、カンパをする気もちはある。

・　生徒会などを通じて働きかけはできないか。

＊他の保養の受け入れ先などはどうしているのか？

・　やはり、バザーやカンパ等でやっているのではないか。

＊今検討中の保養先はロシアの非汚染地域。キャンプの時に、夏休み中であろうし、日本の高校生や大学生がぼらんてあで一緒に参加できればいい

＊チェルノブイリは終わったと全面的な手当の打ち切りがすすんでいるようだが。

・　新しい原発建設の動きと関連しているのか。しかし被害は続いていく。

2）チェルノブイリを忘れないために　～ベラルーシと日本で若者と共に～

・なぜチェルノブイリなのか？放射能の害を世界にアピールするため。未来に向かって繋いでいくのは放射能の害。たった 20 年で忘れてはいけない。原発事故の起きた日やインターネットなどで呼びかけるなどしてはどうか。広島・長崎について、峠三吉の原爆詩集を朗読劇で生徒達が演じている。

・踊りの内容が分かってない時もあるので、先に内容を紹介することがあってもいいのでは。

・現地の状況・交流の様子・20 年経った健康被害などをビデオや DVD などで広げる。短くテーマごとにまとめて理解してもらえるようにする。

・現地の若者はしっかりやっていた。私たちの方が知らないし、関心もない。関心を持ちつづけるのは難しい。どのようして「きっかけ」を作るか。

3）ベラルーシの友人と日本の私たちがお互いに知るために

・日本で保養を受け入れ、若者で交流する。日本の若者のためになる。

・甲状腺癌の子供と話した時、「おばあちゃん、私もそんなに元気になるの。」と言われた。交流に力を入れなければと思った。（長崎被爆者・山科さんの発言）

（報告：猪又雅子）

☆グループ３

1）現地の子供たちのために　～保養と支援の継続～

・被害の実態を明らかにすることが必要だと思う。

・ロシア　ノボツィプコフなど５キュリー以上の汚染地に住んでいる子ども達の健康状態を知りたい。

・チェルノブイリ２０年でベラルーシ政府が援助を打ち切ろうとしているのは、大きな問題。私たちも救援を続けるが、ベラルーシ政府が基本的な保障をするべきだと思う。

・ベラルーシ方々のニーズに応じた支援活動をしたい。そのためにできるだけ多くの人が訪問して現地の人たちと交流するのがよいと思う。

・他団体で里子支援をしているが、期間が限られているし、その子だけの支援になる。救援を広げていくのは、非常にむずかしい。

2）チェルノブイリを忘れないために　～ベラルーシと日本で若者と共に～

・ＨＰやブログなどで不特定多数、特に若い人たちに伝える。

・反原発関係だけでなく、いろいろなテーマで開かれている集会に参加しアピールする。問題意識を持っている人たちに訴える方が、理解が得やすいと思う。

・娘が環境科学科に進学した。家庭で子どもに言い続けることも大切。

・自分の気持ちの中でチェルノブイリの記憶を風化させないために、しばしば現地の人たちのことを思い、自分が始めてこの活動に参加した頃の初心を思い出すようにしている。

・いろいろ調べることによって、身近かにリアルに感じるようになった。

・ベラルーシ訪問で自分の気持ちに焼きついたと思う。

3）ベラルーシの友人と日本の私たちがお互いに知るために

・ベラルーシで見学した教育の場では先生方の情熱を感じた。生徒への対応や手作り教材などに学び、それらの情報を紹介したらどうか。

・日本の実情に関しても、知識や情報を得て、自国のことをもっと理解していなければと思う。

・高校生に出前授業などで話をしたが、なかなか

グループ討論

伝わらなかった。でも継続していくのが大切だと思う。話す技術や訴える芸を磨く必要もあると感じた。

（報告：田中章子）

ベラルーシの新聞「ベルガゼータ」１１月１９日より

「反応が起こった」ー原発建設命令に大統領が署名

１１月１２日に、命令書に署名がなされたことにより、正式に原発建設が決まった。加圧式型軽水炉が使用される予定。米国と日本（ウエスチングハウスと東芝の合弁）、フランス（アレバ）、ロシア（アトム・ストロイエコンパクト）この三者の原子炉がベラルーシに適していると考えられる。ロシアのものが、共通の言語、共通の技術、ローンの適応、専門家の教育などの観点からより望ましいので、ほぼ、ロシアの会社に決定であろう。原発がロシアの会社に決まれば、燃料もロシアから輸入されるであろう。ただ、ロシアの原子炉には、ロシアの燃料だけでなく、中国やフランスのものも適用できる。フランンスのアレバは、原発がもしロシア製になった場合、ロシアやベラルーシに燃料を提供できると宣言している。ただ、原子炉の製造元は、燃料もそこから輸入しなと、事故がないという保証はない。

燃料に関し、IAEA は、地球上のウラン鉱脈はあと８０年持つと報告している。また、現在は、採掘量が使用量を上回っている。しかし現在、先進国では原発の割合が増加しており、原発の操業期間も４０－６０年に延長されている。燃料が足りなくなったらどうするかという問題は解決していない。それほど先のことを考慮するのでなければ、とりあえず、当面のベラルーシで、原発稼働後に電力価格がいくらくらいになるかは大体計算できる。現在のドルレートであれば、2020 年には 2015 年に比べ、電力は１０－１５％安くなるだろう。他の燃料にとってかわることはできないが、ロシアのガスへの依存度は減るだろう。

どんな希望的観測があっても、核廃棄物の処理については、学者も話そうとしない。廃棄物施設は、原発の建設が始まってから考えられる。しかし、廃棄物に関しては今の段階で考えておく必要がある。

４０年間、原発が稼働すれば、廃棄物はミンスクの“ジナモ”スタジアム（陸上競技スタジアム）の容積にもなる。ベラルーシも廃棄物を自国で保管しなければならない。学者たちは、時が経てば安全な保管方法や処理方法が考えられるだろうと思っているようだ。スイスでは、現在、処理をしなくても廃棄物を処分できる方法が考えられている（？）。ベラルーシでは、地下 500sm の岩盤に保管場所を作れば、３０万年は保管できるという方法を研究している。

（抄訳、松川直子）

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2007. 11.19～2008.2.15

前田由隆　山崎清　猪又雅子　長沢智行　長沢由美　三田宜充　崎山昇　吉崎恵美子　花岡光義
尾崎浩子　荒川千恵子　奥平純子　村上千佳子　染木冨美代　古閑紀秋　堀内正枝　大田美智子
小谷勝彦　山平利恵　岡村達郎　即得寺　西島治子　山平利恵　石橋喜　斎藤美智子　中川慶子
橋本真佐男　坂上絢子　植田成人 田原良次　田原良次　井上和歌　川崎公彦　尾上照子
鮫島忠久　藤田達　黒川喜美子　林祐介　志賀直子　阪口博子　今中哲二　曽我日出夫
斉藤充子　門林洋子　鈴木満喜子　都藤清美 大阪市立矢田南中学校分会 清水昭　富田洋香
松本郁夫　阪田幸子　谷口衣江　北川諭　日下郁郎 東口友子　稲田みどり　村上玲子

（順不同・敬称略）

♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇お知らせ◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣

☆ 3月1日（土）「救援関西」運営会議
　場所：事務局、１０時半から
　問い合わせ：0798-44-2614ふりつ、　または<cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp>

☆ 3月2日（日）学習討論集会「地震と原発」
　場所：ヒューマインド（芦原橋）
　時間：１時半から
　主催：若狭連帯行動ネットワーク
　問い合わせ：0729-39-5660（くぼ）

☆ 3月6日（木）喜友名さんの悪性リンパ腫・原発被曝労災認定を求めて／厚生労働省交渉
　場所：参議院会館、時間：午後１時から
　詳細は：「ヒバク反対キャンペーン」HP参照
　　<http://www1.odn.ne.jp/hibaku-hantai/>

☆ 3月１６日（日）
～チェルノブイリの子供達と一緒に～
国際文化交流劇団―曼珠沙華―なら公演
場所：ならまちセンター市民ホール
時間：午後６時開演（５時半開場）　チケット2500円
問い合わせ：0742-71-8795（堀田）

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局
〒546-0031　大阪市東住吉区田辺 1-9-12　山科方
郵便振替：００９１０－ ２－ ３２７５２